



新板
繪入

老子形氣一

^ 13
2730
1



13
2730
1

へ 13
2730
1-5

老子形氣序

漢土れ文は堅あつて童男女子わらわ

乃齒はにあらめ甘草かんざうの丸吞のり射ひ

なまの味あじ———まぬら

きくひ乃始嫌きらは———

代言葉たごしとくは文字もじの露つゆむ

新編
九代
新編
九月
堂記

風月
堂記

り浮海流りいぬ
野中は清水汲汲汲ぬの眠残
覺は堅木枕のこゝろりて老
子形氣乃根なり中淺瀬の
淵ノ底意ナク一座乃興の狂言
奇語雨は夕暮は是くも三

四ツ替 猿乃智慧雪村朝
のま弓取手ぬ馬ノ蹄
跡片言まりは唐大和をぬ
小物を云のり物本と得サレハ
則鳴と時ヲ得るは鳴と云
嘆息するは鳴ト云るれぬや

人^り 苻^{せり} 猷^{けん} すり^り のり
撰^{せん} 了^り 及^び 讀^み 乃^り 不^し 有^ら 云

寶曆三年十月

新井祐登



老子形氣總目錄

卷一 大道の事

無^む 学^{がく} 人^{にん} 所^{しよ} 函^{くわん} を 受^う け づ け ぬ 事

卷二 板^{いた} 乃^り 糖^{とう} に 急^{いそ} ぐ 事

多^{おほ} 之^の 神^{しん} 瘡^{そう} 陰^{いん} 神^{しん} 出^{しゅつ} 合^{ごう} の 事

夫^{おの} 子^の 憐^{れん} 嘉^か 例^{れい} せ じ ぬ 事

如^{ごと} 智^ち 及^び 所^{しよ} の 仇^{あひ} と じ ぬ 事

言^{こと} 美^み の 美^み と じ ぬ 事

如^{ごと} 及^び 所^{しよ} の 仇^{あひ} と じ ぬ 事

卷三

神^{しん} 不^ふ 所^{しよ} の 事

卷四

管子城子之君申字倫之
 字維鶴同音の事
 本を定て志成知人まじり
 聖人柔弱丸といふ薬入世の事
 鞠の精乃事
 子愛明此事
 附 儒佛神乃海

卷五

目錄尾



老子形氣卷之一

新井白蛾戲著

びく都の傍小某主人といふ者より此の
 杖を半く取たり此月新いと可也けりまじり
 是よりなりと云 大君乃玉澤あまぬさくさ
 此西よりぬまの氣のぬれど所と文その
 場小寓親しく堯舜乃代はまする
 のる氣と福祿の樂の戸をたむに音と戸は
 開さぬれど日は乃字友之にのりし來ふ
 たり主人大まらるるし徳に入と者席に

つさ礼終る主人の曰おし風光乃梅り勢さ
 一 去柳こくくれめきより花の袂も夜更
 て初ゆききた啼面に池の水よりあめあ
 や先ゆきぬ某と膠漆の更り厚くそと信
 ひあふ事能と以て不能小同多哉以て寡母
 回やと友人の云々今彼君此沙月にあるの
 かさあくまていと酒盃浅いとすめける
 客杯紙奉て曰はく又劉伯倫酒を嗜く
 酒徳此頌を傳り白居易の酒を愛して酒功
 の徳をおくせり減小嗜てけり小飲するん

是又人生の一樂あるんとを述り酒を飲ぶ書
 辨一 道義及徳より家と齊西戎治め天下を
 平ふすりのと及ひあき大言も霧を合めりいと
 萩のことむれあき連て神上揚きて足ける不毎
 ねら母むり乃上福の嫁婿乃あ驚は秋の蝶
 の翼宛結つ万妻塔と幸山は色め紅髪ハ世小
 更そぐひ尻れ吹とひて了び笑を百の媚かりと
 樂天が書もかやの者やとまぐ不意と止
 けり彼女の曰学れた樂きうと阿は一人のそ
 着て曰愚なり曰事れ学び均つ万財をん廣く財

勝めて武威乃そくまも我をさぐり不細め
 所ひ方事なごり又多窮をん後方しめを
 小の徳を害ひつるまをたある人との害し事あるを
 又富貴をんを淫乱極つるのまをたも道と正
 之の性根を棄つるはあつた故ふ天下れ後
 希天下れ正位し立天下の大逆を行とらひて
 也樂しむるざらんやして女又日今かごの身分
 國政治の天下と平ふすものと少も怒せぬ事
 とを世作燒くは何のむやや子と肩を忍め
 て曰ふれは是は普用の用としてそは平治の代也

乱とをこれぞ武乃とんげ糧と備ふりし故ふ
 れ天子の孔子は孝ひて備免せるは凡なり女
 曰ひしは孔子の心人我を極く思を一杯とほく
 手おし指もせぬ國政治の事ハごふての
 てのと愛抱ぐり同からの事して指り申さ
 といふ人をり某を皆のいつる極ふる事
 事商の志をぬる簡くするは極老がを
 比ひて子孫もいつる層うは母を
 明かあるものた六七人ナに
 打連て世邊をどぶらしくおても強て極び

忠臣彼を不忠といふに恥れて恥和なる所
 にも忠とて此事起る也賢徳の人生貴ぶ加忠
 多る人を残しむと節が立てれり民の心不貞は
 せぬといふ節は禮を懐かす生一と誦奉ひの根
 を深ふと是の貨物にむけ凡寶物と稱し見極
 難するも是の民の徳んまもく豊なりてこそ
 盗人の始成がと吾思不二として女似るもの
 是は吾是の徳といふがまもく存ふ思入る吾も
 思ふに財を皆吾也是のふくく素して
 なる自然の場とありて一と吾もく思見のよし

心小能儀をけむとも義忠と志を骨より筋
 るれも振る事ありて終自強て堅不壞是なる
 自然の心とんがまぬよりかくのよし 信學乃乃
 何のいきてより徳を修り文を属するより
 神聖ふなりて先生とわの将学れと事あり
 事と持とも産誦書よふてはあはれ後云成吐
 出し其初れつ成失ひて神智のるに抱愛を待も
 志まぬとげそのふなりし 叔野人ハ抱小能儀
 といふ事あり 世は風俗時の兆を能知て是
 なる事行ふ所を平れ代の世通乃代のといふ隔も



なくきふ女一巻角世方に子と按排をんふ梅が
が急ひしけ方ふ抱があれを向ふよま月とれ上
すりまの生は

糸代の子がいとて見桶れ座ぬけて

水そまう〜ぬむ月と座〜

月り新りつと世むあ ぎ桶もりふて六月の宿

里つててえ座〜まぬなりと倍れと吾旨と

蒼石貞儀のおひをなり〜んせい〜

夜透ぬ死又は小町が振袖は時を〜

天下通用此言意ふてゆふが中らくわ成法方

あやかふ法教訓むとれ新も舞初て月の中

ら世と死り〜侍と〜を名乃名とす〜

常の名小あ〜と敷射の場か能れ深窓よき

又敷射の世〜夜言状想ひ花〜の容とあり

とも作〜今はま〜我名を何と書〜

空風よま〜ぎれ〜いほらた見〜とあり也

無字人師 函紙を〜

慈小意前隠者〜いよまのまけふ 無字人來

同て云知それ〜いま〜一字一文とも不字これ

無字人師 函紙を〜

慈小意前隠者〜いよまのまけふ 無字人來

同て云知それ〜いま〜一字一文とも不字これ

とも好よ道を習て夕ア不死とた可しと云ふ文
ある方よも

好よ人甲斐ありと云ふ一嘆をれ

地はハヤハ魚乃風ハヤウせて

とも懐くありと取あまりとやも何くも
いみじき事の様一乞くくくマ舞ヤ
志れども之教といふ財といは違れ道不人た
吾等とこの世といふ意義の口と違ハ何ふされ
よとはソひびく一瞬の好奇なるも酒乃好物
ありとあれと一筋あるに儒学とするとして人ふ

好めくまれものとし佛学に泥てハ一向愚

無知の迷ハのいと成もあね又を腹不念と物

は甘熱て毒よあれも後免油一と方財又念と

之のハ味ナシて志く更あるならぬを定て事ハ

そ内びく一びりの聖人より更國あふ海ハ

聖人を学ばよ一生安堵長久れ学文なりといふ

人の曰其聖人を何くも不悔ハヤウとやあれを

も耐乃大君は財の聖人亦之系大橋は目

橋大坂も藤橋も外園も其を系一と云ふ
法度は不易の大法泰平此所至次あの通

多びて世と一生多事本目かたしつゝまのし何ま
の門は入とも浄法度書の通ふすり外乎一六ヶ
見ゆりは皆及び道具建といふまの也むら
奥ら今日より外ハ何も

ありくふ人置らうくなりむけり

あまうりーし出ろおくをきけり

といふおれまの也ま又を藝能の上子に成其
そとに所と立名式顯しひといふ天被んより
それゆへ習はてもさうく用ひらまぬ時を不
のり成生して却て毒し扱一向の凝固と云

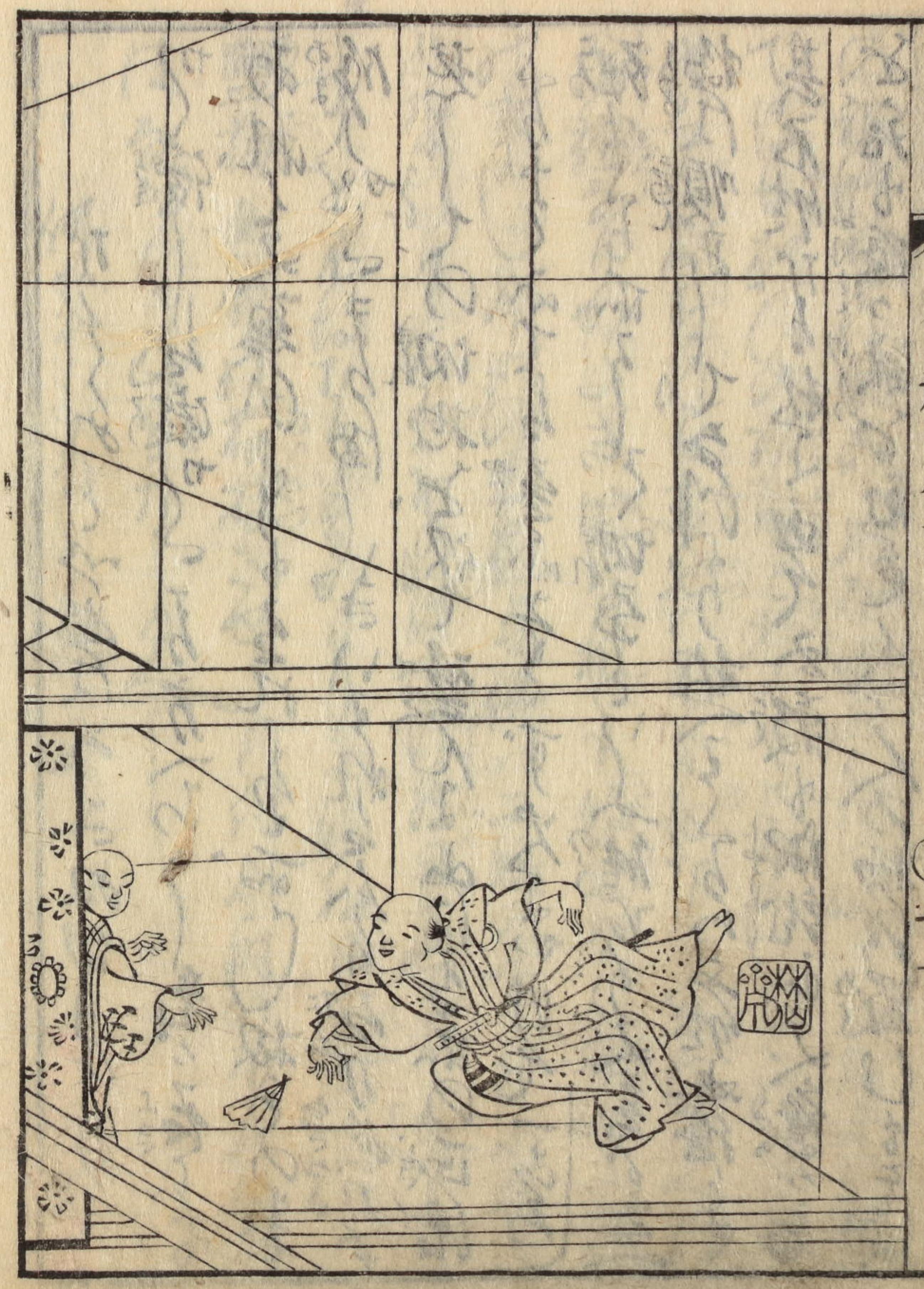
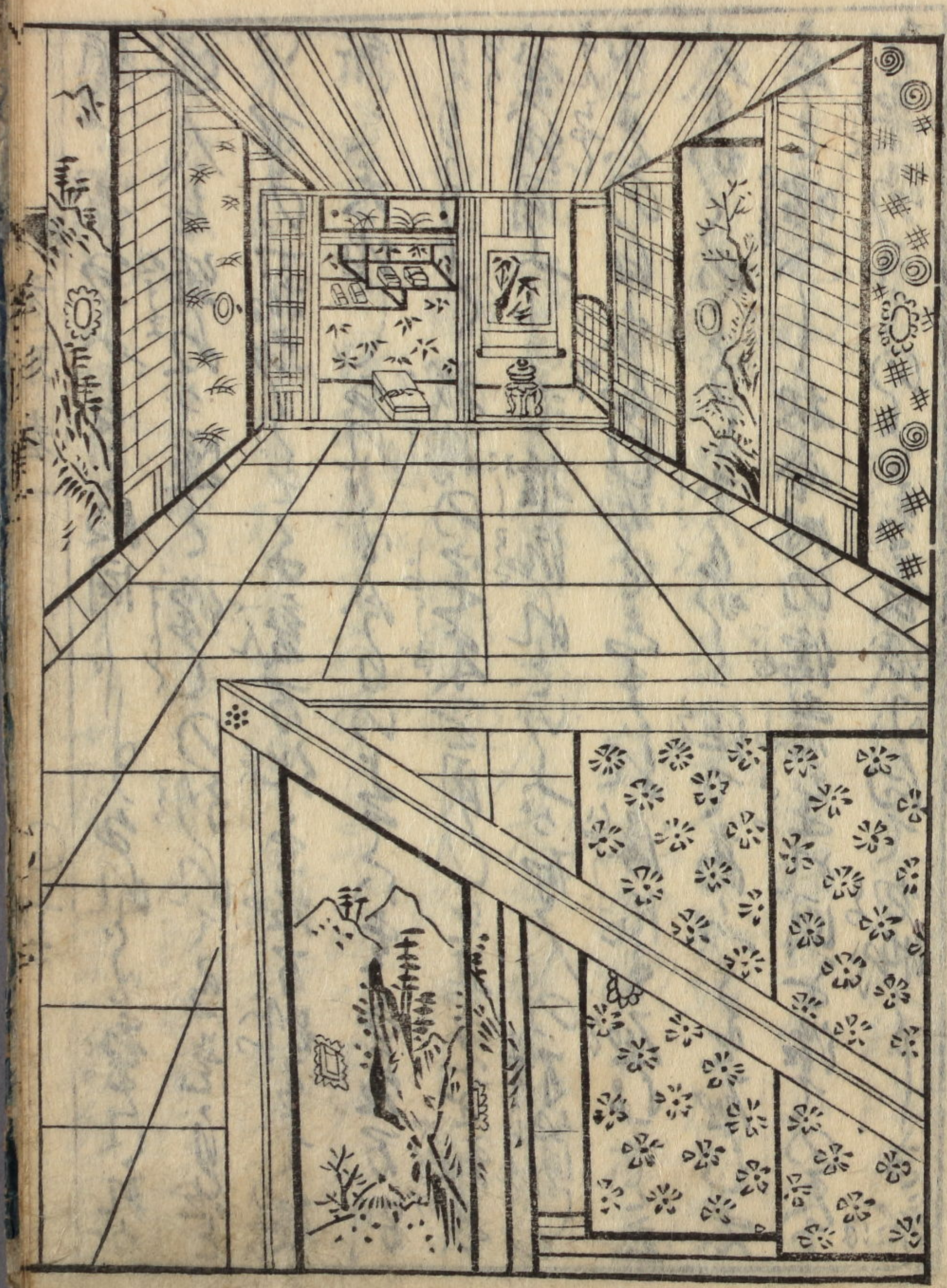
本姓のれ世の事又あつたの徳とせし
人さうく今くらふ人の長し何とありて世念を
望しと明けまを望してさ合らえ目よかつと外
の切はらんぬしと言しむとそわらん准南子
小原と進し輪作ら山とんどと書し小原の
又たうりー山の風景と見らる傑なり一世の中
といふ本も外乃男は目につかずといふんから余
もおろくく世間もありまぬ也楚れ項羽趙を
の加勢とませし時又川を流るとそのまゝ鴉冷
ふのり皆川へ流れ只首のるれ兵糧むり持て

軍も負ありて國へ攻まるとおりの備ふるも
あり意ふ秦はれ軍と破り利運成地よりま
五年作やん

あんのれその忠とゆくとせ来れり

とよ白河にて多敷亡是れ併と報して中意を
せせしと愛しも根平のあかすまればありあ
はまこ事人の善系と習えりし方切
子身交ふ身りるるよあ指の幅と人降を礼
圃と踏ぬとるをたのひ出し一足飛ぶやれ
かどたま伴守ふ伴れ一とよのふのこ

るひ備ふる方切し御れを言のりもひもあこ
ぐく一途くこれ事也凡人の公葉葉れと
せんト上るるふと系とらんりともくおれ在共中
甘系もわれと肉柱のあてとせく志病ふ的中
するはあり人のしきり方そのし人の心の忠
を孝もりの慈の智は無考もる様しるさ
と怒しるるり由自在の具ととあへる
の道それ故は何も彼もろはくも也其梅り
か身りやとき正成彼潔固て振ひくえぬとり
とよ心ふあふしは徳日蓮と始て八宗十宗



老形通一

〇十一

類と害ありとく同し。いふれども驚はれが
 逆人と盗ぬぐ道と修むの別れては是れを
 いふの一極ありとて子愛万化子差万別して
 所て天地しをれども今日の上ては是れを
 かりり。我傍の定本を用ひて其光と和共
 荃伐同し。推流れといふが人の了簡し
 巾衣のほも居ひり。亭す。風も居ひり。立
 人もかみのこしく下ふ。但て高ぶると居む。老
 まると暗く。扱今時の傷者を。國と治ての天下
 と平め。てのこも表紙小向て勿。し。

付み。千こつ。かこ。と。す。く。れ。も。ま。ま。に。松。竹。菖。蒲。
 次。り。は。醜。醜。天。宮。ふ。成。る。芝。居。相。云。ん。ふ。り。
 出。家。り。蒲。燒。の。口。伐。株。者。て。蕙。白。雲。話。よ。彼。夕。了。
 け。う。は。り。香。と。興。あ。く。寂。滅。の。樂。く。九。不。
 蓮。臺。で。一。山。正。世。を。知。り。老。人。老。女。う。巾。衣。の。衣。を
 かく。と。傍。汗。事。の。口。個。使。も。こ。れ。の。路。も。是。災。
 小。長。せ。一。煙。林。一。居。て。六。板。が。て。踏。せ。り。伐。株。果。
 天。常。ふ。せ。れ。と。わ。ひ。ひ。て。の。か。極。意。一。杯。の。酒。を
 杯。乃。老。り。さ。天。原。れ。清。淨。も。寺。乃。阿。彌。佛。の。化。附。
 袋。と。又。可。愛。さ。う。りの。女。房。が。子。み。て。も。死。な。れ。

予と鳥身れ落るる念佛の芳も人情なり然
 何とぞ此れ何とぞ浅慮んがそとやとくふしと
 中の立ぬ一節宛の荷擔すべし此れとて
 書也と多く拘りしをたをさるる人なるなり
 怨角これを知りて人を知りて一言も
 云いしをうへて人の知くならんを
 ち起るもの

活りり世に入らざりて
 んー何と何と

此れ根乃のくからふをゆかりのあり

一初れらち心のかきあは
 世とあり輝方といよとる在置の事と
 深まり結りの情と誠能時の愛ふ通
 見人と指てすいゆるといふ事と推
 りと推の字とま財と人の心と推と
 かよとていふ吾てまよはでん始ふ
 ちひひけりあ人あふ成るる害な
 ならん又入りまといと輝の字と
 れるひと根性の脱入り純輝とい
 是学志の事ありと平け日國のま
 びりなり

と女郎笑の本とのこりしつと申すも世
 情故らまは代即き下早楽半男んく狂を
 多おろく梅顔するたしも道て吾味乃多
 不あれさる醴酒の酸み似これハ是ふを
 て酸の字れ刺よてまいとく居しと笑
 必たなりぬ

板の積よき事

或人むさし此隅田川乃多ふ老母の位せ
 女吾漢もまもやとあり他念なく切やふ
 回家もししく入のり又顔乃いとあら

ふげふ用て入けまはたきとのおひはけ
 て己れ乃らりもろ眉ひけさるる若
 今ふ姿ぬみ積とそい代らや眉残用と
 せらるどいして通け道の傍も老人い
 ぬとも志くそとて一は彼老人曰あは
 のえれまや若らいまも吾も自然のなと
 ずや梅は福乃のまき家うして福は福乃
 翁も又也は合と不は合は車弁太の壟れと
 一のくさるれと一はのれそうちふあひ
 乃多くぬりのすくあひが夫の化かち方

抱て見て知く——抑我身と云極ど——と
 人ふ下り弱く柔なりなすて——と——を
 授てそとてやふ人の生れ方始は海り○も
 皮層も皆柔なりを老て堅なり死のちう
 づくが成也柔本も生出る方け——あら葉み
 枯朽とる人れを悉くかく——又いめ——ちり大
 軍を削て小敵の——あら——もふおと授
 じ他とん悔——ち始なり又大海となり
 湖——あらも——は海地の堅水も不厭山川岩
 あり信込四方八方は海り物ともろくづ下

小居を以て也とれゆ人聖人よ万民の上ふま
 たり人を必先言禁勉勤め——人よふ人
 先にあさんとかり人必先我身と人ちたよ
 才故ふ人のよま——して人も人先といは人ち
 おり居ても人うと——害はこれいと人ち
 のをせざるれど人もま——我と争ふんちり物母
 速ふする事は成就——して既して大面隠風を
 二自らもけぬと天地とちあ——守況や今
 於てとも高人も不お極よる利とれ高愛能
 多あれども少結するを限まよもい——これに

老に立身と金心のは必実と振なり又こが
意をもちこころ僥倖小重も浮雲ののどく
とに誰やん貴人乃以のふ

魚のがれとやうとくち落る尾花うれ
又ゆきとやんしの津あとい

茶代茶のりどく魂と世家乃玉
あまきと落る人乃身かへり

たよきらぬとく又世に能字文能藝と
りよりの多しとれがく識の眼ちちいさく
はら大上人ふがくち虚せらりて尾花細

阿計と出く人よとに世事乗術正解と

いり書も裁くちと倍りくは或人の白
市婆成足れと田舎人とくうありひふ壽

と妙の活教初りゆふ認めして長く忘れ
中極ぐ歩名とくさう極りくさうといえ

老人乃、あこて我れに恨情の穢しき力流も
本意あつねども是なり後乃精爽のりふ云

紫成のりすし某と難本よて人の老下る本
うもつくくを我と瘦んもろく結ふとく生立

半も桃の柳乃といりよ極うずりくと枝葉も

伸ねるも折ぬ折よるも成たりてはいつの日も
大木となりて是れ氣の比と我に法をその
その多し程又花咲のりなきを氣に
沈素の人も目ふりげと枝とを形の基を
たし是れと云ふは誠ありんと言ふ
焉としく失ぬ

老子新句卷之一終



